

日本特許庁  
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出願年月日

Date of Application: 2002年 7月12日

出願番号

Application Number: 特願2002-203993

[ST.10/C]:

[JP2002-203993]

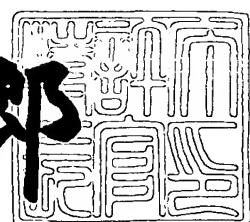
出願人

Applicant(s): セイコーエプソン株式会社

2003年 6月 3日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

太田 信一郎



出証番号 出証特2003-3043194

【書類名】 特許願

【整理番号】 EP-0389301

【提出日】 平成14年 7月12日

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 A61B 5/00

【発明者】

【住所又は居所】 長野県諏訪市大和3丁目3番5号 セイコーエプソン株式会社内

【氏名】 天野 和彦

【発明者】

【住所又は居所】 福岡県福岡市城南区七隈八丁目19-1 福岡大学内

【氏名】 田中 宏暁

【特許出願人】

【識別番号】 000002369

【氏名又は名称】 セイコーエプソン株式会社

【代理人】

【識別番号】 100090479

【弁理士】

【氏名又は名称】 井上 一

【電話番号】 03-5397-0891

【選任した代理人】

【識別番号】 100090387

【弁理士】

【氏名又は名称】 布施 行夫

【電話番号】 03-5397-0891

【選任した代理人】

【識別番号】 100090398

【弁理士】

【氏名又は名称】 大渕 美千栄

【電話番号】 03-5397-0891

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 039491

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9402500

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 運動負荷強度評価装置

【特許請求の範囲】

【請求項1】 運動中の被験者に装着され、非侵襲的に末梢における脈波を検出する脈波検出部と、

検出された脈波に基づいて、心臓の駆出時間を反映する前記脈波の特徴より前記駆出時間を測定する駆出時間測定部と、

時間経過毎に前記駆出時間測定部にて測定される前記駆出時間が入力され、各駆出時間の変化を検出する駆出時間変化検出部と、

を有する運動負荷強度評価装置。

【請求項2】 請求項1において、

前記被験者の運動による体動による起因した、体動波形を検出する体動波形検出部と、

前記脈波検出部からの脈波より、前記体動波形検出部からの体動波形を除去する体動波形除去部と、

をさらに有し、

前記駆出時間測定部には、前記体動波形が除去された脈波が入力される運動負荷強度評価装置。

【請求項3】 請求項1または2において、

前記駆出時間測定部は、前記脈波の立ち上がりからディクロティクノッチに至るまでの時間間隔を測定する運動負荷強度評価装置。

【請求項4】 請求項1乃至3のいずれかにおいて、

前記駆出時間測定部は、前記脈波を一次微分する一次微分部と、一次微分波形を二次微分する二次微分部とを有し、二次微分波形に基づいて前記駆出時間を測定する運動負荷強度評価装置。

【請求項5】 請求項1乃至3のいずれかにおいて、

前記駆出時間測定部は、前記脈波の波高値と基準値とを比較するコンパレータを含み、前記コンパレータからの矩形波の波幅に基づいて前記駆出時間を測定す

る運動負荷強度評価装置。

【請求項6】 請求項5において、

前記コンパレータは、帰還抵抗が正の入力端子に接続されたヒステリシス付コンパレータである運動負荷強度評価装置。

【請求項7】 請求項1において、

前記脈波検出部からの脈波をフーリエ変換するフーリエ変換部をさらに有し、

前記駆出時間検出部は、フーリエ変換された周波数スペクトルの中から、心臓の駆出時間を反映する前記脈波の特徴に基づく周波数スペクトルを抽出し、

前記駆出時間変化検出部は、時間経過毎に前記駆出時間測定部より抽出された周波数スペクトルの周波数の変化を検出する運動負荷強度評価装置。

【請求項8】 請求項2において、

前記脈波検出部からの脈波をフーリエ変換する第1のフーリエ変換部と、

前記体動波形検出部からの体動波形をフーリエ変換する第2のフーリエ変換部と、

をさらに有し、

前記体動波形除去部は、前記第1、第2のフーリエ変換部からの各周波数帯域の周波数スペクトルのうち、同一周波数の周波数スペクトル同士を減算する運動負荷強度評価装置。

【請求項9】 請求項8において、

前記駆出時間検出部は、前記体動波形除去部からの周波数スペクトルの中から、心臓の駆出時間を反映する前記脈波の特徴に基づく周波数スペクトルを抽出し、

前記駆出時間変化検出部は、時間経過毎に前記駆出時間測定部より抽出された周波数スペクトルの周波数の変化を検出する運動負荷強度評価装置。

【請求項10】 請求項1乃至9のいずれかにおいて、

前記駆出時間変化検出部の出力に基づいて、前記駆出時間が変化した時に、無酸素運動に入ったことを告知する告知部をさらに有する運動負荷強度評価装置。

【請求項11】 運動中の被験者に装着され、非侵襲的に末梢における脈波を検出する脈波検出部と、

検出された脈波に基づいて、心臓の駆出時間を反映する前記脈波の特徴より前記駆出時間を測定する駆出時間測定部と、

前記駆出時間と運動負荷強度との相関データを記憶する記憶部と、

前記駆出時間測定部にて測定される前記駆出時間に基づいて、前記記憶部より対応する運動負荷強度を検出する運動負荷強度検出部と、  
を有する運動負荷強度評価装置。

【請求項12】 請求項11において、

時間経過毎に前記駆出時間測定部にて測定される前記駆出時間が入力され、各駆出時間の変化を検出する駆出時間変化検出部がさらに設けられ、

前記運動負荷強度検出部は、前記駆出時間変化検出部にて前記駆出時間が変化した時に、前記運動負荷強度を検出する運動負荷強度評価装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、被験者の運動負荷強度を評価する運動負荷強度評価装置に関する。特に、現在の運動強度が有酸素運動であるか無酸素運動であるかを評価したり、あるいは運動負荷強度自体を評価することができる運動負荷強度評価装置に関する。

【0002】

【背景技術及び発明が解決しようとする課題】

有酸素運動から無酸素運動へ切り換わる閾値を運動負荷強度または酸素摂取量の数値として表現した、無酸素性作業閾値 (AT : anaerobic threshold) は、呼吸器系や循環器系の機能に対する運動効果の評価や、スポーツのトレーニングにおける適切な運動負荷強度の選択などを行うために有用な指標であることが知られている。無酸素性作業閾値の検出は、血液中の乳酸濃度が急激に増加し始める運動負荷強度または酸素摂取量の数値である乳酸閾値 (LT : lactic threshold) の検出、または、運動負荷強度の増加に伴う呼気中の二酸化炭素の増加率が一段と高くなる運動負荷強度または酸素摂取量の数値である換気閾値 (VT : ventilatory threshold) の検出によって行うことができる。

【0003】

しかしながら、血液中の乳酸値の測定は、血液の採取が必要となるため侵襲的に行わねばならず、運動の実施とともに手軽に行うということは困難である。

【0004】

また、換気閾値を検出するために行われる、酸素摂取量や二酸化炭素発生量の監視は、装置から伸びる管路に接続されたマウスピースを通して呼吸を行い、吸気や呼気の量と成分を計測する必要があるため、大掛かりな装置を必要とする。

【0005】

本発明の目的は、非侵襲的に検出される脈波に基づいて、運動負荷強度を評価することができる運動負荷強度評価装置を提供することにある。

【0006】

本発明の他の目的は、有酸素運動を維持できる運動負荷強度の上限に達したか否かを評価することができる運動負荷強度評価装置を提供することにある。

【0007】

【課題を解決するための手段】

本発明の一態様に係る運動負荷強度評価装置は、

運動中の被験者に装着され、非侵襲的に末梢における脈波を検出する脈波検出部と、

検出された脈波に基づいて、心臓の駆出時間を反映する前記脈波の特徴より前記駆出時間を測定する駆出時間測定部と、

時間経過毎に前記駆出時間測定部にて測定される前記駆出時間が入力され、各駆出時間の変化を検出する駆出時間変化検出部と、  
を有する。

【0008】

本発明の一態様では、非侵襲的に検出された脈波中の特徴より、心臓の駆出時間に相当する時間（以下、これも駆出時間という）が測定される。この駆出時間と心拍数とは相関があり、駆出時間が一定であれば心拍数はほぼ一定であり、有酸素運動の範囲となる。しかし、駆出時間が短くなると心拍数が増え、無酸素運動の範囲に入る。よって、駆出時間変化検出部にて駆出時間の変化を検出すれば

、現在の運動が有酸素運動の運動負荷強度であるのか、あるいは無酸素運動の運動負荷強度であるかを評価できる。この駆出時間は血液中の乳酸値とも相関があり、駆出時間が変化（短くなる）すると、乳酸値の増加率が高まることが確認された。よって、駆出時間の変化は、乳酸閾値を越えたことを意味し、運動負荷強度が過大であると評価することができる。

## 【0009】

本発明の一態様では、前記被験者の運動による体動による体動に起因した、体動波形を検出する体動波形検出部と、前記脈波検出部からの脈波より、前記体動波形検出部からの体動波形を除去する体動波形除去部とをさらに設けることができる。運動中の体動が脈波に悪影響を及ぼすので、この悪影響を除去することが望ましいからである。この場合、駆出時間測定部には、体動波形が除去された脈波が入力されるので、より精度高く運動負荷強度を評価できる。

## 【0010】

前記駆出時間測定部は、前記脈波の立ち上がりからディクロティクノッチに至るまでの時間間隔を測定することができる。詳細を後述するように、脈波の立ち上がりからディクロティクノッチに至るまでの時間間隔が、駆出時間を反映しているからである。

## 【0011】

前記駆出時間測定部は、前記脈波を一次微分する一次微分部と、一次微分波形を二次微分する二次微分部とを有することができる。二次微分波形では、上述した脈波の特徴がより顕在化するので、それに基づいて駆出時間を測定することができるからである。

## 【0012】

前記駆出時間測定部は、脈波の波高値と基準値とを比較するコンパレータを含むことができる。このコンパレータからの矩形波の波幅に基づいて駆出時間を測定することができる。このとき、帰還抵抗が正の入力端子に接続されたヒステリシス付コンパレータを用いることができる。ヒステリシス付コンパレータは、例えばディクロティクノッチ付近で矩形波が立ち下がった直後に、脈波の波高値が基準値を再度上回ったとしても、矩形波の立ち上がりを遅らせることができるか

らである。これにより、駆出時間を反映した矩形波を確保することができる。

【0013】

前記脈波検出部からの脈波をフーリエ変換するフーリエ変換部をさらに有することができる。この場合、前記駆出時間検出部は、フーリエ変換された周波数スペクトルの中から、心臓の駆出時間を反映する前記脈波の特徴に基づく周波数スペクトルを抽出する。前記駆出時間変化検出部は、時間経過毎に前記駆出時間測定部より抽出された周波数スペクトルの周波数の変化を検出する。こうして、周波数スペクトルに基づいて、駆出時間の変化を検出できる。

【0014】

前記脈波検出部からの脈波をフーリエ変換する第1のフーリエ変換部と、前記体動波形検出部からの体動波形をフーリエ変換する第2のフーリエ変換部とをさらに有することができる。この場合、前記体動波形除去部は、前記第1、第2のフーリエ変換部からの各周波数帯域の周波数スペクトルのうち、同一周波数の周波数スペクトル同士を減算する。こうして、周波数スペクトルの段階で体動を除去することができる。これ以降の駆出時間検出と駆出時間変化検出も、上記と同様に周波数スペクトルに基づいて実施できる。

【0015】

本発明では、前記駆出時間が変化した時に、無酸素運動に入ったことを告知する告知部をさらに有することができる。これにより、被験者は有酸素運動を継続することができ、告知があった場合に運動負荷強度を低下させれば良い。

【0016】

本発明の他の態様では、上述した駆出時間変化検出部に代えて、あるいはそれに追加して、前記駆出時間測定部にて測定される前記駆出時間に基づいて、前記記憶部より対応する運動負荷強度を検出する運動負荷強度検出部を設けることができる。こうすると、運動中の負荷強度を認識することができる。

【0017】

この場合、前記運動負荷強度検出部は、前記駆出時間変化検出部にて前記駆出時間が変化した時に、前記運動負荷強度を検出するようにしてよい。

【0018】

## 【発明の実施の形態】

以下、本発明の一実施形態について、図面を参照して説明する。

## (駆出時間の説明)

図1は、心臓の周期を示したものである。図1において、波形SWは心電波形、波形MH1は心臓から流出する直後の大動脈血圧波形、波形MH2は末梢部（橈骨動脈）の一般的な脈波波形である。図1において、血液の流動に伴う時間遅れは無視してある。駆出時間ED (Ejection Duration)は、厳密な意味においては、大動脈血圧波形MH1における大動脈弁開放時刻t1と大動脈弁閉鎖時刻t2の時間間隔となり、安静時において、280ms程度である。大動脈弁の閉鎖は心室の収縮によって起こるので、この時間間隔は、心室収縮期の時間 (Systolic Time)とほぼ一致する。

## 【0019】

ところで、末梢部の脈波波形MH2におけるノッチN1は、大動脈弁閉鎖によって生じるものである。このため、脈波波形MH2における最小ピークP0から最大ピークP1の直後に生じるピークP2までの時間間隔は、見積の収縮時間 (Estimated Systolic Time)と呼ばれ、駆出時間EDに相当する。

## 【0020】

ところで、脈波波形には個人差があり、また同一個人においても波形形状が体調などによって変化することが知られている。このため、末梢部の脈波波形MH2は、波形MH3に示すように、ピークP2とピークP3が重なり、ノッチN1が生じない場合がある。この場合には、厳密な意味において駆出時間EDを計測することは難しいが、ディクトロティクノッチ (Dictrotic Notch) N2のタイミングが一般的な脈波波形MH2より早く現われる傾向がある。従って、脈波の立ち上がり点P0からディクローティクノッチN2におけるピークP4までの時間間隔を、駆出時間EDとして取り扱っても実用上問題はない。本実施形態では、図1の脈波MH2, MH3の種類に拘らず、点P0からディクロティクノッチP4までの時間間隔を駆出時間EDとして取り扱うものとする。

## 【0021】

このことから、駆出時間EDは、厳密な意味のみならず、心室収縮期の時間 (

Sysolic Time) 及び見積の収縮時間 (Estimated Sysolic Time) を含むものとして、以下の説明を進める。

(駆出時間と乳酸量との相関)

図2は、ある被験者の駆出時間と乳酸値との相関を示す特性図である。図2の横軸は運動の負荷強度 (Watt) であり、左縦軸は駆出時間 (m sec) 、右縦軸は血液中に発生する乳酸値 (m mol/l) である。

【0022】

ここで、血液中の乳酸値と運動負荷強度に応じた疲労との相関は公知であり、図2においても、血液中の乳酸値は運動の負荷強度が大きくなると増大する。

【0023】

また、運動の負荷強度が小さければ、疲労も少なく血液中の乳酸量はさほど上昇しないことも知られている。

【0024】

一方、駆出時間と心拍数とは相関があり、駆出時間が一定であれば心拍数はほぼ一定であり、有酸素運動の範囲となる。しかし、駆出時間が短くなると心拍数が増え、無酸素運動の範囲に入る。人体に最適な運動とは、有酸素運動を続けることであり、有酸素運動の運動負荷強度の上限を知ることは極めて有用である。

【0025】

図2に示すように、運動負荷強度が100 [Watt] 付近までは、駆出時間EDはほぼ変化がなく、血液中の乳酸値の変化も少ない。しかし、運動負荷強度が100 [Watt] を超えると、駆出時間EDが短くなり、血液中の乳酸値の増加率が高くなる。この被験者の場合、運動負荷強度が100 [Watt] 付近の点が、乳酸閾値LT (Lactate Threshold) となる。

【0026】

このように、運動負荷中に駆出時間EDを監視し、それがほぼ一定であれば乳酸閾値LTに達する前の有酸素運動の範囲であり、駆出時間EDが変化したときに乳酸閾値LTを越え、無酸素運動の範囲に突入したことが分かる。

(運動負荷強度評価装置の概要)

本実施形態の運動負荷強度評価装置は、上述した原理に基づいて、被験者の運

動負荷強度を評価するものであり、図3のブロック図に示す構成を有する。図3において、運動負荷強度評価装置10は、脈波検出部60、体動波形検出部70、体動波形除去部80、駆出時間測定部90、駆出時間変化検出部100及び告知部110を有する。

## 【0027】

脈波検出部60は、被験者の末梢部の脈波を非侵襲的に検出するものである。体動波形検出部70は、運動中の被験者の体動に起因した体動波形を検出するものであり、例えば加速度センサにて構成できる。体動波形除去部80は、脈波検出部60からの脈波より、体動波形検出部70からの体動波形を除去するものである。駆出時間測定部90は、体動波形が除去された脈波PTG（例えば図1の脈波MH2またはMH3）より、ピークP0からピークP4に至る時間間隔（退出時間ED）を測定するものである。駆出時間変化検出部100は、時間経過毎に駆出時間測定部90にて測定される駆出時間EDが入力され、各駆出時間EDの変化を検出するものである。もし、図2の乳酸閾値LTを越える運動負荷強度にて被験者が運動していれば、駆出時間EDが変化するので、これを検出できる。告知部110は、駆出時間変化検出部100にて駆出時間の変化が検出された時に、被験者にそのことを告知するものである。この告知により、被験者は有酸素運動から無酸素運動の運動負荷強度に入ったことを検知できる。よって、その告知後に運動負荷強度を弱めれば、有酸素運動を継続実施することが可能となる。

## （運動負荷強度評価装置の外観構成）

本実施形態の運動負荷強度評価装置は、例えば図4（A）、図4（B）および図4（C）に示すような外観的構成とすることができる。運動負荷強度評価装置10は、腕時計状の構造を有する装置本体12と、この装置本体12のコネクタ部20にコネクタピース57を介して接続されるケーブル58と、このケーブル58の先端側に設けられた脈波検出部60とを含んで構成されている。装置本体12にはリストバンド56が取り付けられ、リストバンド56によって装置本体12が被験者の手首に装着される。

## 【0028】

装置本体12はコネクタ部20を備えており、コネクタ部20にはケーブル58の端部となっているコネクタピース57が着脱自在に取り付けられている。

## 【0029】

図4 (C) は、このコネクタピース57を取り外したコネクタ部20を示しており、例えば、ケーブル58との接続ピン21や、データ転送を行うためのLED22、フォトトランジスタ23を備えている。

## 【0030】

また、装置本体12の表面側には、告知部110の一例として例えば液晶パネルからなる表示部54が設けられている。表示部54は、セグメント表示領域や、ドット表示領域などを有し、運動負荷強度の評価結果など表示する。なお、表示部54には液晶パネルではなく他の表示装置を用いてもよい。

## 【0031】

装置本体12の内部には、各種演算や変換などを制御するCPU (central processing unit) 、CPUを動作させるプログラムその他を記憶するメモリを備え（図示省略）、装置本体12の外周部には各種操作や入力を行うためのボタンスイッチ14がそれぞれ設けられている。

## 【0032】

一方、脈波検出部60は、図4 (B) に示すように、センサ固定用バンド62によって遮光されながら、被験者の人差し指の根本付近に装着される。このように、脈波検出部60を指の根本付近に装着すると、ケーブル58が短くて済むので、装着しても邪魔にならない。また、指の根元付近は指先に比べると気温による血流量の変化が少ないため、検出した脈波波形に対する気温などの影響が比較的少ない。

## (脈波検出部)

脈波検出部60は、例えば図5に示すように、LED64、フォトトランジスタ65などを含み、非侵襲的すなわち皮膚を破ることなく末梢における脈波を検出できるように構成されている。この脈波検出部60は、脈波波形が血流量の変動波形（容積脈波波形）とほぼ同様の波形となることを利用し、毛細血管網に対する光照射と、毛細血管内の血液による反射光量の変動または透過光量の変動の

検出とを行うように形成された光センサを用いて脈波（容積脈波）を検出する。

【0033】

さらに具体的には、脈波検出部60は、スイッチSWがオン状態となり、電源電圧が印加されると、LED64から光が照射される。この照射光は、被験者の血管や組織によって反射した後に、フォトトランジスタ65によって受光される。したがって、フォトトランジスタ65の光電流を電圧に変換したものが、脈波検出部60の信号MHとして出力される。

【0034】

ここで、LED64の発光波長は、血液中のヘモグロビンの吸収波長ピーク付近に選ばれる。このため、受光レベルは血流量に応じて変化する。したがって、受光レベルを検出することによって、脈波波形が検出されることとなる。例えば、LED64としては、InGaN系（インジウム-ガリウム-窒素系）の青色LEDが好適である。このLEDの発光スペクトルは、450nm付近を発光ピークとし、その発光波長域は、350nmから600nmまでの範囲とすることができる。

【0035】

このような発光特性を有するLEDに対応するフォトトランジスタ65として、本実施形態においては、例えばGaAsP系（ガリウム-砒素-リン系）のものを用いることができる。このフォトトランジスタ65の受光波長領域は、主要感度領域が300nmから600nmまでの範囲とし、300nm以下にも感度領域があるものとすることができる。

【0036】

このような青色LED64とフォトトランジスタ65とを組み合わせると、その重なり領域である300nmから600nmまでの波長領域において、脈波を検出することができ、以下のようない利点がある。

【0037】

まず、外光に含まれる光のうち、波長領域が700nm以下の光は、指の組織を透過しにくい傾向があるため、外光がセンサ固定用バンドで覆われていない指の部分に照射されても、指の組織を介してフォトトランジスタ65まで到達せず

、検出に影響を与えない波長領域の光のみがフォトトランジスタ65に達する。一方、300nmより長い波長領域の光は、皮膚表面でほとんど吸収されるので、受光波長領域を700nm以下としても、実質的な受光波長領域は、300nm～700nmとなる。したがって、指を大掛かりに覆わなくとも、外光の影響を抑圧することができる。また、血液中のヘモグロビンは、波長が300nmから700nmまでの光に対する吸光係数が大きく、波長が880nmの光に対する吸光係数に比して数倍～約100倍以上大きい。したがって、この例のように、ヘモグロビンの吸光特性に合わせて、吸光特性が大きい波長領域（300nmから700nm）の光を検出光として用いると、その検出値は、血量変化に応じて感度よく変化するので、血量変化に基づく脈波波形のS/N比を高めることができる。

#### 【0038】

このように、脈波検出部60は、血流量に対応して変化する脈波すなわち容積脈波を、皮膚付近に存在する毛細血管網における赤血球量の変動としてとらえ、皮膚に照射した光の透過量または反射量の変動として検出することができるため、センサを末梢動脈例えば橈骨動脈や側指動脈の位置に合わせることなく検出することができる。したがって、脈波検出部60は、皮膚付近に存在する毛細血管における赤血球量の変動を、末梢動脈における脈波（容積脈波）として安定して検出することが可能である。なお、脈波検出部60は、脈圧に基づいて脈波を検出するものであっても良い。

#### （駆出時間測定部の構成例1）

駆出時間EDは、図1にて説明した通り、図1の脈波波形MH2またはMH3において、脈波の立ち上がり点P0から、ディクロティクノッチP4までの時間間隔である。

#### 【0039】

ここで、点P0及び点P4は脈波波形MHから直接求めても良いが、脈波波形を二回微分した加速度波形を求めるか、脈波波形における変極点P0、P4の位置がより顕在化する。そこで、図6に示すように、駆出時間測定部90は、体動波形除去部80からの脈波PTGを一次微分する一次微分部92と、一次微分波

形F D P T Gを二次微分する二次微分部94とを有する。

【0040】

図7 (A) は体動波形が除去された脈波の原波形P T G、図7 (B) は一次微分波形F D P T G (速度波形)、図7 (C) は二次微分波形S D P T G (加速度波形)をそれぞれ示している。図7 (C) に示すように、二次微分波形S D P T Gには、図1の変極点P 0～P 4に相当する、より明確な変極点a～eが現われる。この二次微分波形S D P T Gにおいて、変極点a～e間の時間間隔が、脈波の立ち上がりからディクロティクノッチまでの駆出時間E Dに相当している。よって、駆出時間測定部90は、二次微分波形S D P T Gから駆出時間E Dを測定することができる。

(駆出時間測定部の構成例2)

駆出時間測定部90は、図8に示すように、体動波形が除去された脈波P T Gに対して、ディクロティクノッチP 4の波高付近に設定され比較値C Oが設定されたコンパレータにて構成できる。このコンパレータの出力は図8に示す矩形波R E Pとなる。なお、図8には説明の便宜上脈波P T G中に矩形波R E Pを記載したが、矩形波のハイレベルはコンパレータの第1の電源電位V d dとなり、ローレベルは第2の電源電位V s sとなる。

【0041】

ここで、矩形波の波幅Wは、点P 0からディクメティクノッチP 4までの駆出時間E Dと相関がある。よって、矩形波Wのパルス幅Wに対応する時間幅を駆出時間E Dとみなすことができる。駆出時間変化検出部100は、その駆出時間E Dの変化を検出することで、運動負荷強度が図2に示す乳酸閾値L Tを超えたか否かを検出することができる。

【0042】

特に、このコンパレータを図9に示すようなヒステリシス付コンパレータ96とすると良い。このヒステリシス付コンパレータ96は、帰還抵抗R 2が+入力端子に接続されて、正帰還がかかるようになっている。

【0043】

+入力端子に入力される電圧は、 $(V_0 - V_+) \times R_1 / (R_1 + R_2) + V$

$V_+$ となる。ここで、出力電圧  $V_0$  は、コンパレータ 96 を駆動する第1, 第2の電源電位  $V_{dd}$ ,  $V_{ss}$  の一方に常に飽和している。

## 【0044】

このため、 $(V_0 - V_+)$  は常に 0 より大きい値となり、+入力端子に入力される電圧は常に、脈波 PTG の電圧レベル  $V_+$  より常に大きくなる。このように正帰還の効果によって見かけ上の+入力電圧が増やされることになる。よって、出力電圧  $V_0$  が  $V_{dd}$  または  $V_{ss}$  のどちらかに飽和すると、入力が変化しても出力電圧は容易に反転しない特性を有する。出力電圧  $V_0$  が  $V_{dd}$  に飽和している時には、脈波 PTG の電圧  $V_+$  が基準値 CO の電圧  $V_-$  を下回っても、直ちに出力が反転しない。よって、図 8において、ディクロティクノッチ P4 付近で矩形波 RE が一旦立ち下がった後には、容易に立ち上がらないので、矩形波 REP を確実に生成できる。

## (運動負荷強度評価装置の変形例)

図 1 の脈波波形 MH2 または MH3 のディクロティクノッチ P4 は、図 2 に示す乳酸閾値 LT に達しない運動負荷強度の負荷中であれば、駆出時間 ED がほぼ一定であることから、ほぼ一定の周波数帯域に現われる。よって、予めディクロティクノッチ P4 を反映する周波数帯域に関心周波数を設定しておき、その関心周波数帯域の周波数スペクトラムが周波数軸上で許容値を超えてずれたら、駆出時間 ED が変化したものと判定できる。乳酸閾値 LT を超える運動負荷強度であれば、駆出時間 ED が短くなるので、ディクロティクノッチ P4 を反映する周波数スペクトルは高周波側に移動するはずであるので、それを検出すれば駆出時間 ED の変化を検出できる。

## 【0045】

このためには、図 10 に示すように、脈波検出部 60 からの脈波をフーリエ変換する第1のフーリエ変換部 120 と、体動波形検出部 70 からの体動波形をフーリエ変換する第2のフーリエ変換部 130 とが設けられる。体動波形除去部 80 は、第1, 第2のフーリエ変換部 120, 130 の出力である周波数スペクトルを、同一周波数同士で引き算して、体動波形を除去する。駆出時間測定部 90 は、関心周波数帯域抽出部にて構成される。この関心周波数帯域抽出部 140 は

、体動波形除去部80からの各種の周波数スペクトルの中から、被験者の駆出時間EDを反映する関心周波数帯域の周波数スペクトルを抽出する。駆出時間変化検出部100は、周波数比較部にて形成され、今回抽出された関心周波数帯域内の周波数スペクトルの周波数を、例えば前回に抽出された基準周波数と比較する。もし、今回抽出の周波数スペクトルが基準周波数よりも周波数軸上で高周波側に許容値を超えて移動していれば、駆出時間EDが変化したと判定できる。

## 【0046】

なお、本発明は上述した各種の実施形態に限定されるものではなく、本発明の要旨の範囲内で種々の変形実施が可能である。

## 【0047】

例えば、被験者について、図2に示すような運動負荷強度と駆出時間の相関データを予め求めておくことができる。すなわち、被験者に歩行や走行などをさせながら運動負荷強度を変化させる運動負荷試験を実施し、各運動負荷時の駆出時間を求めておく。その相関データは、図11に示すように、例えば入力部200を介して記憶部210に記憶される。図11では、図3の駆出時間検出部100に加えてさらに、運動負荷強度検出部220が設けられている。この運動負荷強度検出部220は、駆出時間測定部90からの駆出時間EDと対応する運動負荷強度を、記憶部210から読み出して告知部110に出力するものである。これにより、被験者は現在行っている運動負荷強度を認識することができる。

## 【0048】

ここで、図2に示すように、運動負荷強度が乳酸閾値LTと対応する強度を越えるまでは、駆出時間に実質的な変化はない。よって、駆出時間の変化ない有酸素運動域では、運動負荷強度の検出が困難であるし、有酸素運動域でその運動負荷強度を知るニーズも少ない。よって、本実施形態では、駆出時間変化検出部100に駆出時間が変化した時、つまり無酸素運動域に入ったときに、運動負荷強度検出部220にて運動負荷強度を検出するように構成しても良い。このためには、図11に示すように、駆出時間変化検出部100からの信号が運動負荷強度検出部220に入力されている。

## 【図面の簡単な説明】

【図1】

心臓から流出する直後の脈波波形と末梢部の脈波波形との関係を示す図である。

【図2】

運動負荷強度、血液中の乳酸量及び駆出時間の関係を示す特性図である。

【図3】

本発明の実施形態に係る運動負荷強度評価装置のブロック図である。

【図4】

図4 (A)、図4 (B) 及び図4 (C) は、本発明の実施形態に係る運動負荷強度評価装置の外観図である。

【図5】

図4 (B) に示す脈波検出部の回路構成の一例を示す回路図である。

【図6】

一次・二次微分回路を有する駆出時間測定部のブロック図である。

【図7】

図7 (A) は体動波形が除去された脈波の原波形 P T G、図7 (B) は一次微分波形 F D P T G (速度波形)、図7 (C) は二次微分波形 S D P T G (加速度波形) をそれぞれ示す波形図である。

【図8】

コンパレータにて脈波を比較値と比較することで生成される、駆出時間と相関のある矩形波を示す特性図である。

【図9】

脈波から図8に示す矩形波を生成するヒステリシス付コンパレータの回路図である。

【図10】

駆出時間に相当する周波数スペクトルを監視する運動負荷強度評価装置の変形例を示すブロック図である。

【図11】

予め測定した駆出時間と運動負荷強度との相関データに基づき、運動時に測定

した駆出時間からその運動負荷強度を検出できる変形例のブロック図である。

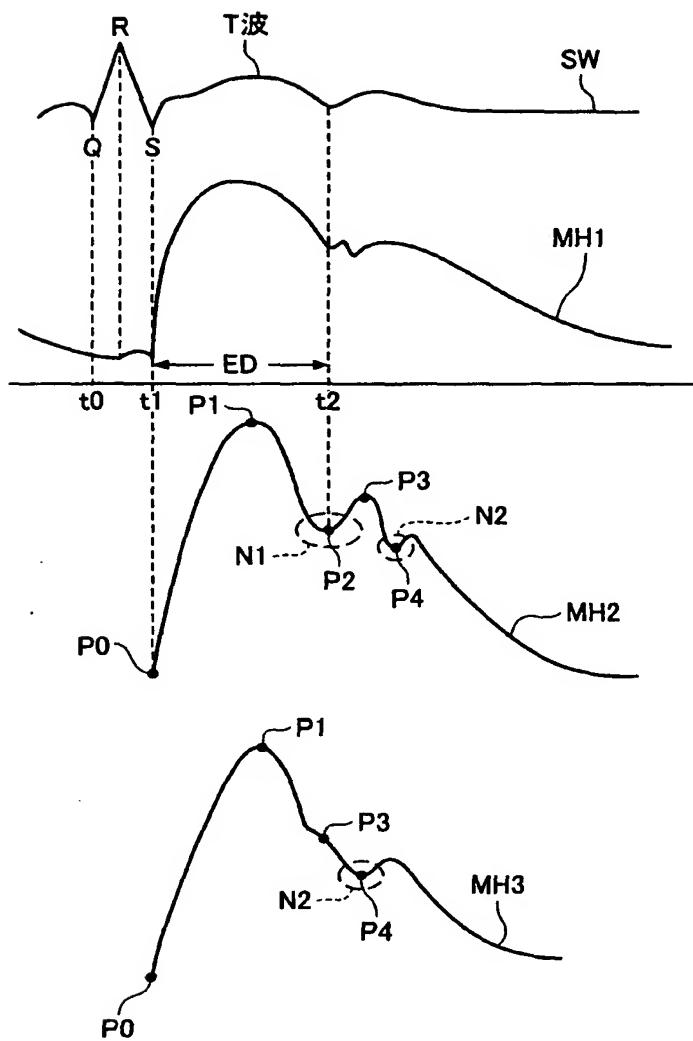
【符号の説明】

- 10 運動負荷強度評価装置
- 60 脈波検出部
- 70 体動波形検出部
- 80 体動波形除去部
- 90 駆出時間測定部
- 92 一次微分部
- 94 二次微分部
- 96 ヒステリシス付コンパレータ
- 100 駆出時間変化検出部
- 110 告知部
- 120 第1のフーリエ変換部
- 130 第2のフーリエ変換部
- 200 入力部
- 210 記憶部
- 220 運動負荷強度検出部

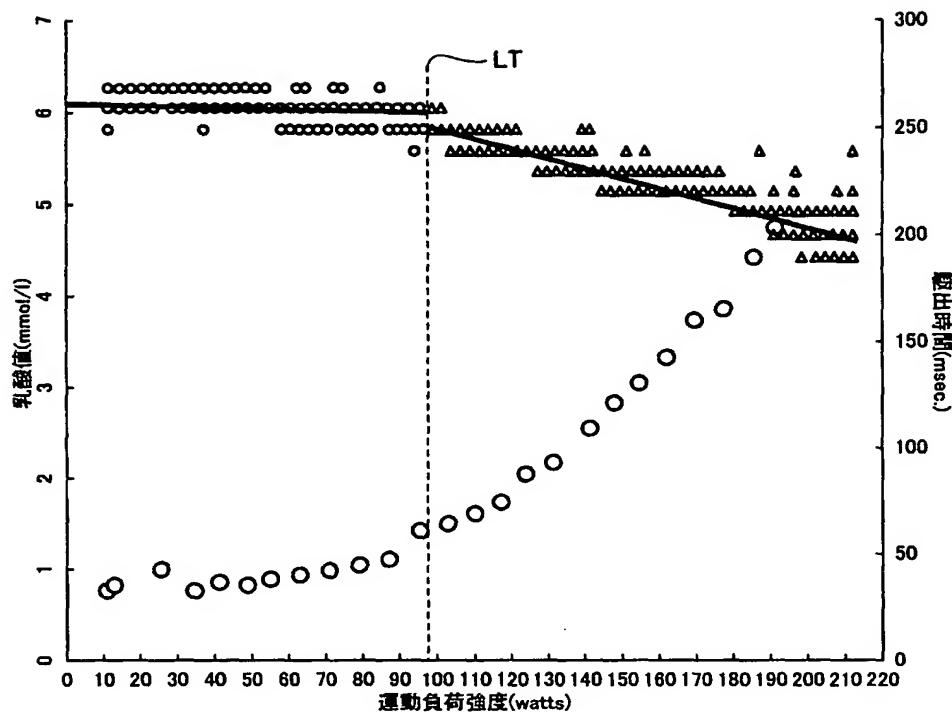
【書類名】

図面

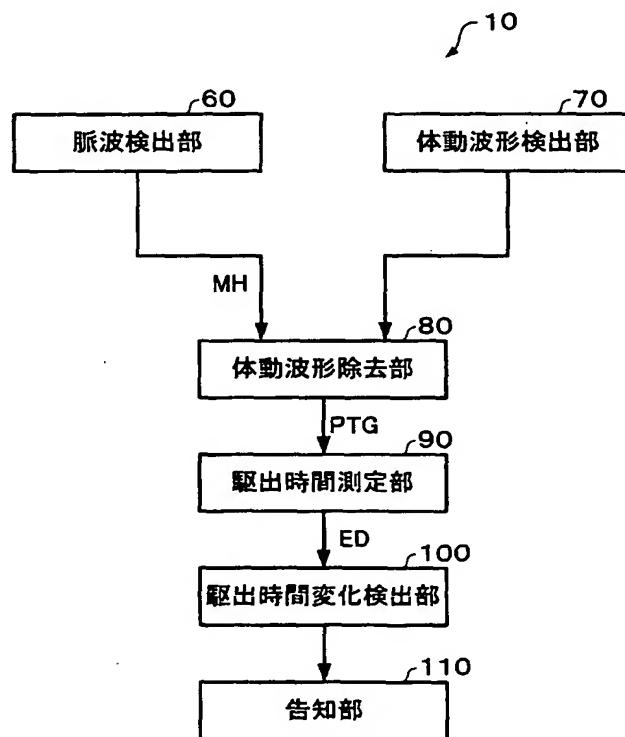
【図1】



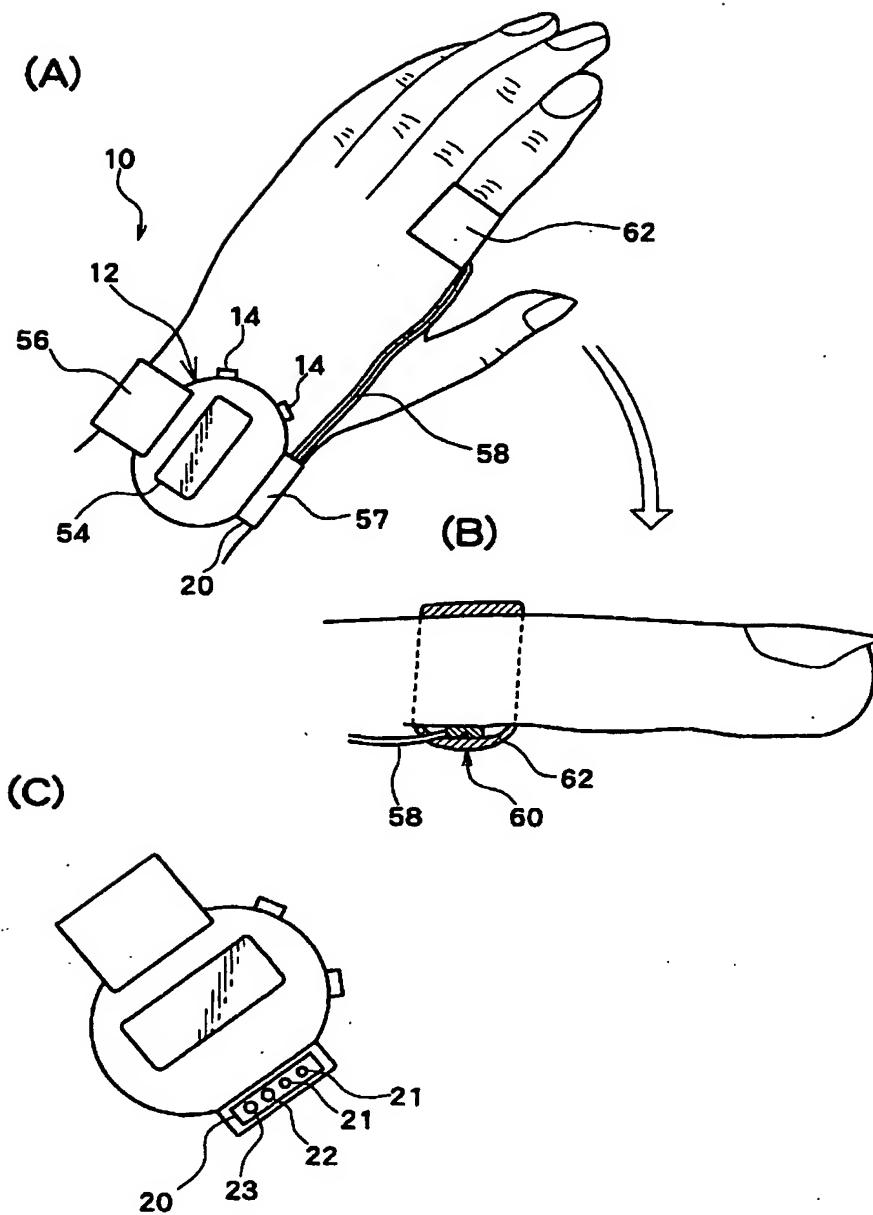
【図2】



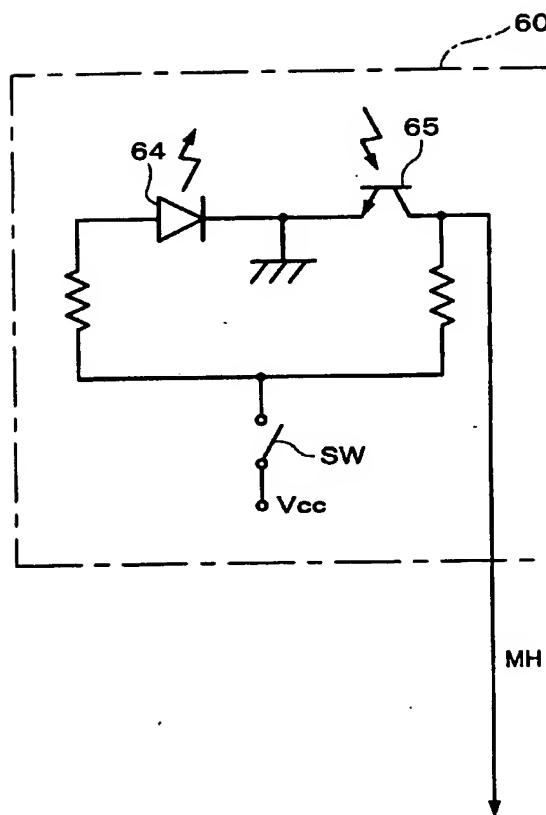
【図3】



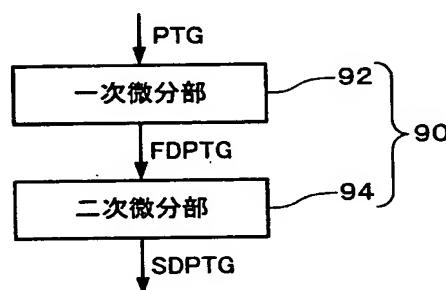
【図4】



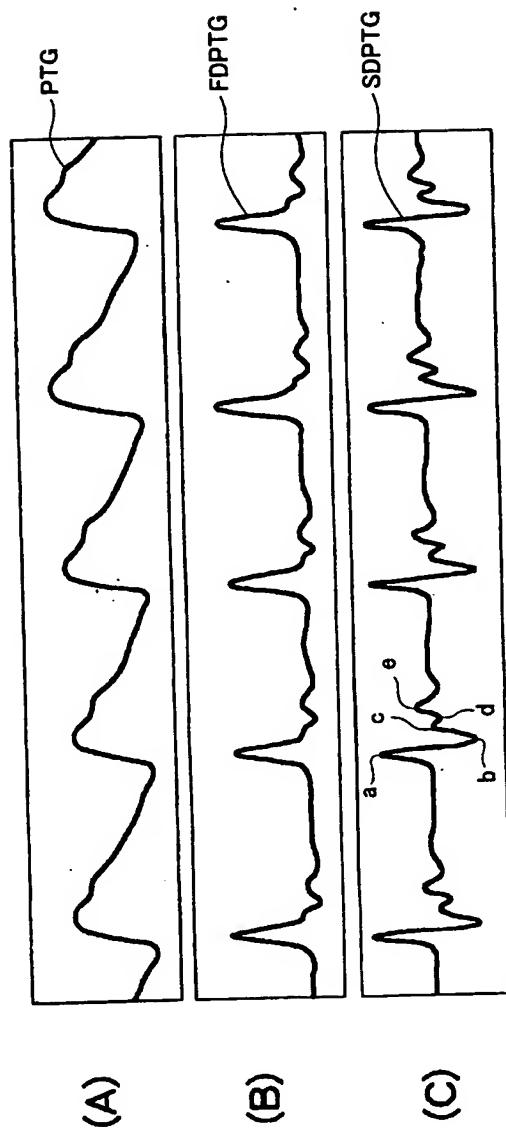
【図5】



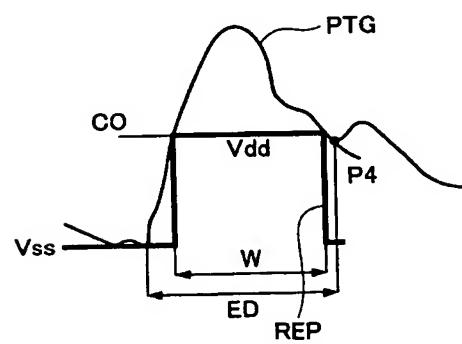
【図6】



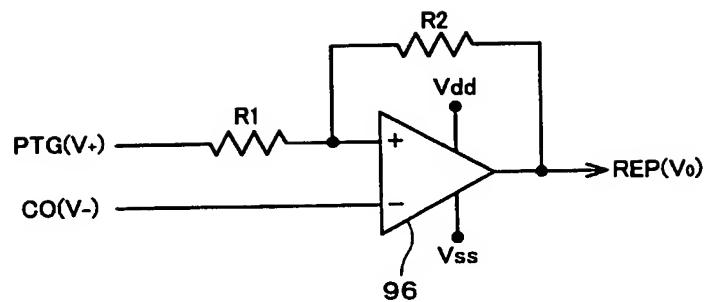
【図7】



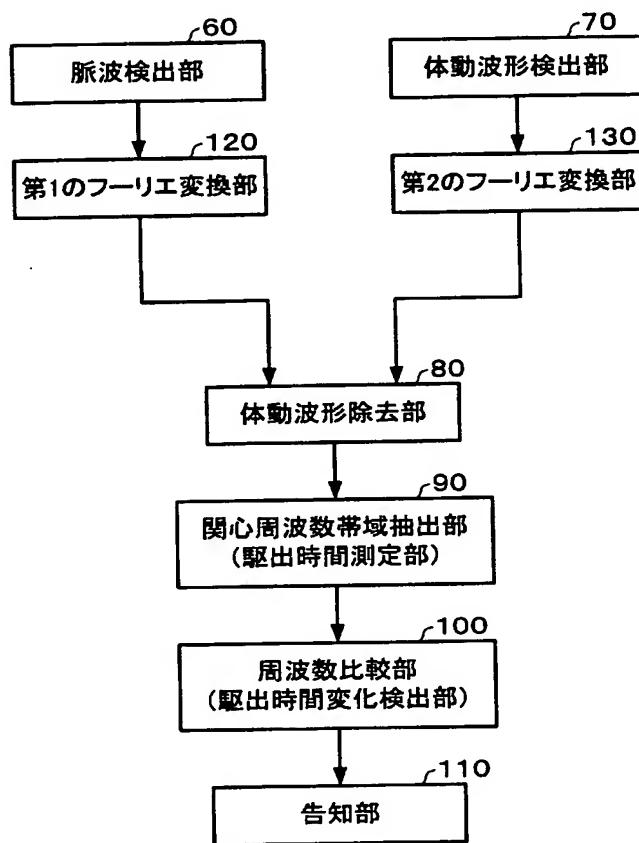
【図8】



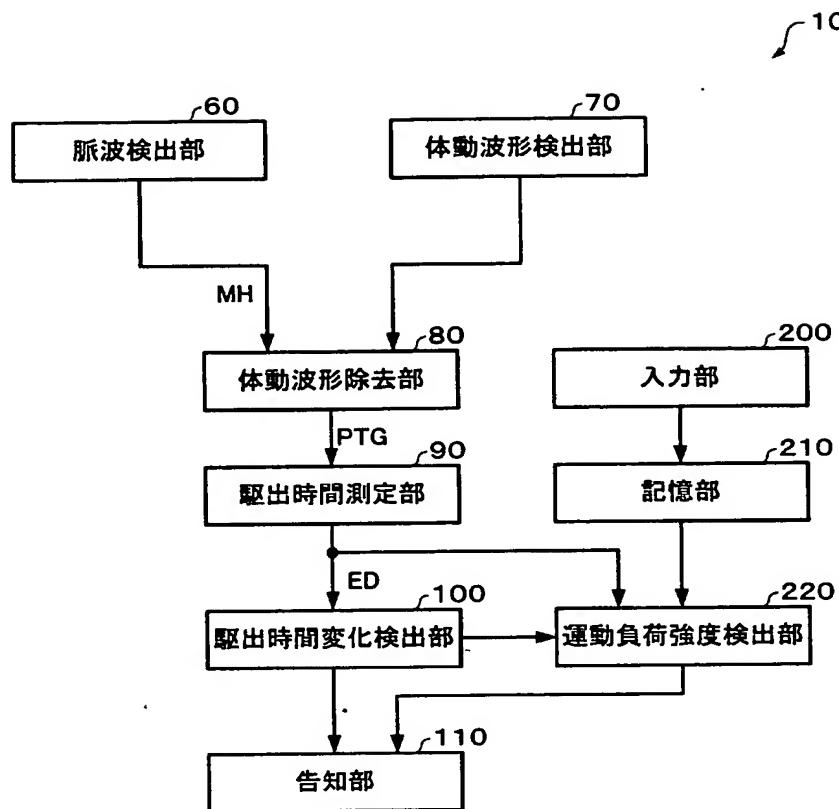
【図9】



【図10】



【図11】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 非侵襲的に検出される脈波の特徴から、運動中の被験者の運動負荷強度を評価する装置を提供すること。

【解決手段】 運動負荷強度評価装置10は、運動中の被験者に装着され、非侵襲的に末梢における脈波を検出する脈波検出部60と、検出された脈波に基づいて、心臓の駆出時間を反映する脈波の特徴（例えばディクロティクノッチ）より駆出時間EDを測定する駆出時間測定部90と、時間経過毎に駆出時間測定部90にて測定される駆出時間EDが入力され、各駆出時間EDの変化を検出する駆出時間変化検出部100とを有する。

【選択図】 図3

出願人履歴情報

識別番号 [000002369]

1. 変更年月日 1990年 8月20日

[変更理由] 新規登録

住 所 東京都新宿区西新宿2丁目4番1号  
氏 名 セイコーホームズ株式会社